

2014年6月29日 主日礼拝

説教 地の塩、世の光

マタイの福音書5章13-16節

【ですの福音】

この個所で主イエスは、「あなたがたは、すでに塩です、光です」とおっしゃいます。「塩になりなさい」でもなく「努力したら、光になれるかもしれない」でもないのです。私たちは、このことを、なんとなく聞き逃してはなりません。はなはだ不完全な私たち。けれども、そんな私たちを「世の光」と主イエスが呼ぶ。福音は「ですの福音」。いま、ここで実現している神さまの恵みです。主イエスが、そんなふうにならなさいとみてください。そのことを知って、自分自身への見方を変えること。それが今日の主イエスのみことばを聞いて、まず私たちが、なすべきことです。

【地の塩】

塩は、目立ってはいけぬもの。塩が料理の中で、自分を主張するようではいけないのです。光もまた、まぶしすぎてひとの目が眩むようなら、だめです。キリスト者たちは、地を腐らせないために、世界を保つために、目立たないところで、自分を注ぎだして生きる。キリスト者たちは、2000年の間、自らをまさに溶かすようにして、働いて来た歴史があります。塩は、自分は溶けてなくなってし

まいます。そして、塩の効き目を残すのです。自分を与え、世界を変えて行くのです。

【世界の光】

地の塩の私たち。自分を溶かして与える私たち。なのに「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(16)とはどういうことなのでしょう。実は、私たちが輝かせるのは自分たちではありません。それは神さまの光。

「良い行い」とあります。父なる神さまがあがめられるような「良い行い」とは、覆い合う共同体としての姿。塩けを保つ者たちは、たがいに和合して生きることが出来る。それが塩のはたらき。私たちは、地の塩として、たがいに和合する。和合して生きる。キリストにあつて新しいいのちを与えられた者たちが、覆い合つて生きる。そこに人々は神さまの光を見、神さまをあがめるのです。

【良い行い=美しい在り方】

「良い行い」は、美しい行いと訳すことができる言葉。何が美しいのか。和合した者たちの姿が美しい。その姿、その在り方、が美しい行い。良い行いです。

教会は生きた人間の集まり。そこにはだれひとり完全に基準を満たしている人などいません。それにもかかわらず、教会は良い行い、

美しい在り方を生きていくことができるのです。たがいに覆い合うことによって。

キリスト者はひとつのからだです。調子が悪いところがあれば、からだは、自然にそれをカバーします。何かの数値が上がったり下がったりすると、他の器官が、自然に、自己主張することなく覆うのです。決して、その器官を取り替えることによって、問題を解決しようとしません。今のからだで生きていく。メンバーを入れ替えるのではなく、このメンバーで生きていく。覆い合つて生きていく。そこによい行い、美しい在り方が、あります。

天の父が崇められる教会は、覆い合う教会。人々はその美しい在り方を見て、神さまを知り、神さまを仰がざるを得なくなります。私たちは立派ではないけれど、私たちの間には、愛がある。それが地の塩、世の光。立派でない私たちの間には、しょっちゅう問題が起こる。けれども問題が起こったときに、それをどのように覆つていくか。そこがクリスチャンのうでのみせどころ。塩と光のみせどころ。悲しいぐらいに愛し合うのが下手な私たち。そんな私たちが愛し合うことを学ぶことができるのは、教会をおいて他にありません。教会は、病院でもあり、リハビリセンター。私たちは安心して、病を覆い合い、しんぼう強くたがいの愛を育むことができる、そんな安全な場所にいるのです。